東京学芸大学　令和６年度「若手教員等研究支援費（若手教員等支援枠）」研究成果報告書

研究課題	理科を専門とする小学校教員のライフストーリー研究 ―専門的力量と信念の形成過程に着目して―	
氏名 渡辺　理文	所属 教職大学院	職名 准教授

APRIN e-ラーニングプログラムの受講　☑←受講済の場合はチェックをすること

【研究成果の概要】　（文字の大きさ９ポイント・字数 800 字～1600 字程度）

理科を専門とする教員としての職能成長やそれに伴うキャリア形成には，多様な道がある。

教員養成段階の学生や経験年数の少ない教員にとって，多様な道を知ることは自身の今後について考えるきっかけになり得る。また，教員経験が豊富な教員にとっても自分の歩んだ道との比較により，これまでの教員人生を振り返るきっかけとして有用な資料になり得る。さらに，教員研修で使用できる教材になり得る。このように，多様な道が示されたものは資料としての価値は高い。

本研究では，ライフストーリーを研究方法論的枠組みとし，インタビュー調査を選択することによって，対象者である小学校理科教員の歩んできた道を描き出すことを目的にした。分析では「どのように専門的力量を形成するのか，信念・アイデンティティを形成するのか」を明らかにすることも目的の一つにした。

目的的サンプリングによって対象者を岩﨑仁先生（和歌山市立教育研究所）に決定した。理由は，教員としての経験年数が多いこと，公立や附属学校，研究所など多様な職場での勤務経験があることから，教員養成段階の学生や経験年数の少ない教員，教員経験が豊富な教員にとって有用な語りが得られると考えたためである。また，本研究代表者の渡辺は対象者が行う授業を実際に参観し，対象者に強く興味をもったことも理由である。

対象者の経歴は次の通りである。神奈川県内の公立小学校→和歌山県内の公立小学校→和歌山大学教育学部附属小学校→和歌山県内の公立小学校→和歌山市立教育研究所。現在は指導主事として，初任者の研修などを担当している。また，現職教員として大学院に進学し，在学中である。

インタビューをオンライン（Zoom を使用）で３回実施した。１回目は，教員養成時代から現在までの経歴を振り返った。２回目は，子どもを見取るとは何かについて質問をした。３回目は，理科授業で子どもを見取るとは何かについて質問をした。研究代表者の渡辺の専門が教育評価ということもあり，２回目以降は見取りについて焦点があてられた。インタビューは，逐語記録を作成後，ラベル付けとコーディングを行った。以下からの結果の【】は見いだされたコードである。

インタビューの内容から，子どもを見取るためには【自分が主語】から【子どもが主語】の授業へ授業観の転換が必要であることが示唆された。子どもが主語の授業では，子どもへの支援が必要であり，そのために見取りが重要になる。また，【その子のことを知りたい】という気持ち，見取るとは【関わること】であるという評価観の転換も重要であることが示唆された。Evaluation と assessment の区別を行うことの重要性が示された。さらに，教員として必要な資質・能力として，授業中に【迷う】こと，子どもを分かった気になる【恐怖心】が必要であることが示唆された。見取るから迷いが生じる，迷いが生じるから見取るという循環が重要であることが示された。

現在行われている評価活動への提案として，【個々の成長】【変容を語ることの楽しさ】子どもと【関わること】子どもと見取ったことを【すり合わせ】ることなどから，目標に準拠した基準からの判断に加えて，個人に準拠した基準からの解釈の必要性が示された。これは学習のための評価や形成的評価につながる概念である。さらには，個人内評価の一つである「イプサティブ評価（ipsative assessment)」につながる概念である，その重要性が示された。

以上のことから，本研究では，対象者のライフストーリーの語りから，「見取り」に焦点があてられ，「子どもを見取るとは何か」についての示唆が得られた。本研究の分析結果は，教員養成段階の学生や経験年数の少ない教員，教員経験が豊富な教員にとっての貴重な資料となり得る。

【研究成果発表方法】

渡辺理文・岩﨑仁（2025)「子どもを見る・見取るとはどういうことか？　小学校理科教員のライフストーリーから探る」『日本理科教育学会全国大会発表論文集』第 24 号，53.（日本理科教育学会オンライン全国大会 2025 発表賞を受賞）

渡辺理文・岩﨑仁（執筆中)「子どもを見取るとはどういうことか？　小学校理科教員のライフストーリー研究を通して」『理科教育学研究』(日本理科教育学会の論文誌への投稿を予定している)

※発表論文名（口頭発表を含む)，氏名，学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに１部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。